

群 教 七	I01 - 05
	令 5.284 集
	特 - 病弱・虚弱

自分のイメージを広げながら、 創り出す喜びを味わう児童の育成

— 病弱児の図画工作科において、材料や友達に
自ら関わることのできる学習環境づくりを通して —

特別研修員 瀧澤 千明

I 研究テーマ設定の理由

研究協力校は病弱特別支援学校小学部である。児童は病棟に入院し、病気や怪我の治療を行いながら学習に取り組んでいるため、学習場所や衛生環境の関係で取り扱える教材や実施できる活動に制限が多い。そのことにより、通常の小学校に比べて、学習や学校生活の面での経験が不足しやすい。例えば、図画工作科においては教材として粘土や自然物などの材料を取り扱うことが難しく、それらに触れる経験が不足している。実際の場所に行く機会が少なく、それらを題材にした作品づくりを行う際に、経験に基づいてイメージを広げていくことが難しいことがある。また、児童は治療内容や体調によって授業への参加が難しかったり、入院期間によって創り出す喜びを味わうことができる段階まで活動に取り組めなかったりすることがある。そこで、本研究では、児童が粘土などの材料やいろいろな道具に存分にに関わり、創り出す喜びを味わうことができる学習環境づくりをしたいと考えた。

また、病弱特別支援学校では、在籍数が常に変動し、少人数学級が多い。さらに、治療中は病室での個別授業となることがあるため、通常の学級と比べて他の児童との対話や学び合いの機会、その対象が少ない状況がある。図画工作科において対話的な活動には、他児童の表現の仕方を参考にして自分の表現に生かしたり、対話を通して創作活動のヒントを得たりすることができる効果が期待される。そこで、児童が他児童や教師との対話的な活動の中で、自らの表現のイメージを広げられるようにする学習環境づくりをしたいと考えた。

以上のような二つの学習環境づくりを行うことで、自分のイメージを広げながら、創り出す喜びを味わう児童を育成したいと考え、本研究の主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

病弱特別支援学校における図画工作科において、児童が自分のイメージを広げながら、創り出す喜びを味わうことができるように、以下の学習環境づくりの手立てを設定した。

手立て1 材料や道具に存分に関われる学習環境づくり

- 安全かつ魅力的な材料の設定
- すぐに手に取ることができる材料や道具の配置

手立て2 児童同士が関わり合える学習環境づくり

- 児童同士で制作の様子を見合える、話しかけられる座席配置

手立て1の安全かつ魅力的な材料とは、児童の病状などの実態を考慮した上で安全に使うことができ、児童の「触ってみたい」「使ってみよう」という意欲を高められるような材料のことである。また、すぐに手に取ることができる材料や道具の配置とは、児童が移動することなくすぐ手に取れる位置に材料や道具を配置することである。

手立て2の児童同士で制作の様子を見合える、話しかけられる座席配置とは、児童同士が向かい合って造形活動に取り組むことができ、普段どおりの声量で自然に会話できる位置に座席を配置することである。なお、治療の都合で病室にいる児童が同様の学習環境下で造形活動に取り組めるように、他児童が活動する教室と病室をオンラインでつなぐこともある。

III 研究のまとめ

1 成果

- 材料や道具に存分に関われる学習環境づくりを行ったことで、児童は材料や道具を自ら試し、自分の創りたいもののイメージを広げながら、時間いっぱい夢中になって造形活動に取り組むことができた。
- 児童同士が関わり合える学習環境づくりを行ったことで、児童は互いの創り方・使っている材料や道具・作品を見合うこと、互いの作品の印象を伝え合うことを通して、イメージを広げながら作品に変化を加えることができた。

2 課題

- 互いの活動の様子を見合う姿は多く見られたが、自発的な対話はあまり引き出せなかった。対話を通じたイメージの広がりをもっと引き出すためには、学び合いを含めたためあてを提示するとよいと考える。

実践例

1 題材名 「レインボーランドの仲間たち」(小学部第5・6学年・2学期)

2 本題材について

本題材では、虹の上に広がる「レインボーランド」、そこに集まる「自分らしい生き物」を表現することをテーマとする。こんな生き物がいたらおもしろい、気になる、仲間になりたいなどの視点から、生き物を空想して表現する。または、自分に似ている、自分の雰囲気と重なる、自分にとってカッコいい、かわいいなどの視点から、実在する生き物を自分なりの解釈で表現する。このような活動を通して、児童はイメージを広げたり、造形活動への意欲を高めたりすることができると思われる。

本題材では、粘土を材料とした造形活動を中心に行う。可塑性が高い軽量紙粘土を材料とすることで、児童が直接素材に触れ、何度も形を作り変えながらじっくりと材料に関わることができる

考える。その過程を通して、イメージを広げながら創りたいものに近付け、創り出す喜びを味わってほしい。

また、児童が互いの活動の様子を見合ったり、伝え合ったりすることでイメージを広げ、表現に生かすことができると考える。

題材の後半には、三原色を元にした混色技法を使って、画用紙に七色の虹を彩色する活動を行う。各児童が「レインボーランド」の一部を制作し、他児童の作品と組み合わせて一つの大きな「レインボーランド」となるようにする。その「レインボーランド」の上に「自分らしい生き物」を自分の好きな位置に置けるようにすることで、机上で一人一人が作ったものが、「レインボーランドの仲間」として友達の作品とつながり、ユニークでバラエティに富んだ仲間たちが集まる、楽しい空間を創り出すことができた喜びを感じることができると考える。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	自分の創りたいもののイメージをもち、材料に何度も触れて試したり、他児童の造形活動の様子を見たり会話をしたりしてイメージを広げ、造形活動に主体的に取り組むことができる。	
評価規準	経験した方法や新しく知った方法を試しながら創っている。 材料に何度も触れて試す、互いの造形活動の様子を見合ったり、伝え合ったりすることでイメージを広げている。 自分のイメージに近付けるように、材料に手を加え続けている。 (知識・技能) (思考・判断・表現) (主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
出会う	第1時	・「レインボーランド」「自分らしい生き物」を創ることを知り、創りたいもののイメージをもって画像を選んだり、アイデアスケッチをしたりする。
つくる	第2・3時	・軽量紙粘土、様々な芯材を使って「自分らしい生き物」を創る。
	第4時	・自分の創りたいもののイメージに合わせて色を選び、粘土に着色する。
	第5時	・「レインボーランド」の土台を、虹の7色を使って混色技法で彩色する。
振り返る	第6時	・完成したレインボーランドの画像を見たり、ハートフルアート展のホームページを見たりして、感想を伝え合う。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全6時間計画の第2・3時に当たる。本時では、児童が材料に何度も触れて試す、互いの活動の様子を見合ったり伝え合ったりすることで、イメージを広げながら造形活動に取り組めるようにするために、次の手立てを具体化した。

手立て1 材料や道具に存分に関わられる学習環境づくり

本時では白い軽量紙粘土を主な材料として設定する。のびがよく、強く手や指で力を加えなくても自在に形を変えることができる軽量紙粘土を用いることで、粘土を用いた造形活動の経験が少ない児童でも、簡単にイメージを形にしやすいうにする。また、白い粘土を用意することによって、粘土の色にとらわれることなく、着色することを想定して、生き物の色や形の発想を広げられるようにする。さらに、様々な形の空き容器やストロー、綿棒等から芯材を選べるようにし、芯材の大きさや形からもイメージを広げられるようにする。

また、粘土や芯材などの材料、粘土ベラやのべ棒などの道具は児童と児童の間に配置し、使いたいものを使いたい時に、移動することなくすぐ手に取れるようにする。

手立て2 児童同士が関わり合える学習環境づくり

児童が互いの活動の様子を見合ったり、伝え合ったりしながら造形活動に取り組めるように、環状に、向かい合わせて座席を配置する。また、普段どおりの声量で自然に会話できるように座席間の距離を近くする。病室にいる児童も、教室とオンラインでつなぎ、互いの様子を見合ったり伝え合ったりする。

4 授業の実際

(1) 手立て1 材料や道具に存分に関わられる学習環境づくり

児童Aは軽量紙粘土の柔らかい感触を気に入り、「柔らかくて気持ちいいな…。ずっと触ってられる。」と話し、手でひとしきり伸ばしたり丸めたり、粘土板に投げつけたりしてから造形活動に入っていた(図1)。児童Aは軽量紙粘土の柔らかい感触、艶々した質感、白い色などから柔らかいお米のイメージをもったと考える。また、軽量紙粘土は他の材料に容易に貼り付き、それでいて粘土板からすぐに剥がすことができることから、児童Aが容易に自分のイメージを形にしていく様子が見られた。



図1 材料との出会い

粘土作品の芯材をペットボトルやプリンのカップ等、大きさや形が様々な空き容器から選ぶことで、自分の創りたいもののおおよその大きさや形をイメージしたり、芯材の形をヒントに新たな形をイメージしたりする様子が見られた。ボリュームを出したい部分には大きさや形が調整しやすい新聞紙やアルミホイル、曲げたい部分には先の曲がるストロー、細長くしたい部分には綿棒や竹串を芯材として活用するなど、各児童が自分のイメージに合わせて工夫して芯材を活用する様子が見られた。



図2 机上の学習環境

児童の移動範囲や手の可動域、目線に配慮し、材料や道具を児童と児童の間のすぐ手に取れる位置に配置した(図2)ことで、アイデアスケッチやイメージした画像を見ながら、材料や道具を何度も持ち替えて選んでいる様子が見られた。その中で、児童Aは、竹串の細長い形や新聞紙の布のような質感からイメージを広げ、刀やのぼり旗を付け加えることができた(図3)。また、パーツを広く薄く仕上げたい時にはのべ棒で粘土を伸ばしたり、小さく細かく仕上げたい時には粘土ベラで粘土を切り取ったりするなど、目的に合わせて道具を選択し、工夫して活用する様子が見られた。



図3 児童A作品

材料や道具に存分に関わられる学習環境づくりを行ったことで、児童は材料や道具から多くのアイデアを得て、イメージを広げながら造形活動に意欲的に取り組むことができた。出来上がった作品を紹介し合う活動の際に、児童Aはイメージしたものや活用した芯材などについて自ら嬉しそうに詳しく説明し、これまでの造形活動に満足している様子が見られた。

(2) 手立て2 児童同士が関わり合える学習環境づくり

児童が互いの活動の様子を見合ったり、伝え合ったりできるように、児童の机を環状に向かい合わせ、材料や道具が共用できるほどの近い距離に配置した。また、他教室・病室で活動している児童とも互いの活動の様子を見たり話しかけたりできるように、各教室・病室をオンラインでつないだ。これらの学習環境づくりを行ったことで、児童は互いにどのような材料・道具を使ってどのようなものを創っているかを、頻繁に見合っていた。一つ目の造形活動では、児童Aが竹串や麵棒を使って芯材にしている様子を見て、児童Bが曲がるストローを利用し始める様子が見られた。

また、手立て1を兼ねて材料や道具を児童と児童の間に置いたことで、材料や道具を共有する様子が見られた。その中で、「はさみを使ってよいかな。」「こっちにあるよ。何を切るの?」「曲がるストローの曲がる場所だけほしい。」などお互いに声をかけ合う様子が見られた。



図4 児童B作品

一つ目の造形活動では、児童Bが実在の深海生物の画像などを元に、体の丸みや足のカーブする様子を見ながら芯材を選んで創っている様子を、児童Aが会話しながらよく見ていた。一つ目の造形活動では素材の特性を元に自分の想像した生き物を創った児童Aが、二つ目の造形活動では、児童Bが深海生物をモチーフに「メンダーコ」(図4)を作ったように、実在する生き物であるカエルをモチーフに創り始めた。



図5 会話の様子

造形活動が一段落したところで、「何を創ったでしょう！」と自分が何を作っているかクイズを出したり、互いの作品を見て「Aさんの作っているカエル、足が気持ち悪いぐらいリアル！」などと感想を伝え合ったりする様子が見られた(図5)。児童Bがこのように発言した

ことで、児童Aは、カエルの虫を採る時に出る長い舌や、足の水かきなどをリアルに表現したことが自分らしい表現として伝わっていることに気付いたと考えられる。児童Aはその後、さらにリアルで気持ち悪いと感じてもらうために、工夫をしながら造形活動を続け、図6のようなカエルをモチーフにした作品「カンガエル」を完成させた。



図6 児童A作品

5 考察

本研究では、児童が自分のイメージを広げながら造形活動に取り組めるようにすること、またその造形活動の過程を通して創り出す喜びを味わえるようにすることをねらい、材料や道具に存分に関わられる学習環境づくりと、児童同士が関わり合える学習環境づくりを行った。

材料や道具に存分に関わられる学習環境づくりとして、二つのことを行った。一つ目は、安全、且つ魅力的な材料の設定である。今回の実践では軽量紙粘土を材料に設定したが、健康上の配慮が必要な児童も、ビニール手袋を使用することで安全に使用することができた。また、軽量紙粘土は児童が思わず「柔らかくて気持ちいいな」と声に出すほど柔らかく、児童はその形を容易に、自在に変形させ、イメージを形にすることができた。また、大きさも形も様々な空き容器を芯材として、自分のイメージした生き物の大きさや形に合わせて選んだり、空き容器の形から新たなイメージをもったりすることができた。そして、竹串やストローなどの形状を利用して、細かな部分の表現に生かすことができた。このような材料の選定をしたことで、児童がイメージを広げながら、思いのままに、存分に造形活動に取り組むことができたと考える。

二つ目は、すぐに、自由に手に取ることができる材料や道具の配置である。実践では、自由に触れながら選び、何度も入れ替え試しながら創り続けることができた。材料の大きさや形、質感、道具の形を、自分の作品と照らし合わせながら表現の仕方を考え、イメージしたことをすぐに試すことができた。このような配置をしたことで、児童が材料や道具からイメージを広げたり、イメージしたことをすぐに試したりすることができたと考える。

児童同士が関わり合える学習環境づくりとして、児童が互いの活動の様子を見合ったり、伝え合ったりできるよう環状に向かい合わせて座席を配置した。実践では、互いの様子を自然と見合い、他児童の創っているものや使用している道具を把握している様子が見られた。実際に、他児童の創っているものを見たり、作品についての会話をしたりした後に、使う道具や手の加え方に変化が生じたり、新しい作品を創り始めたりする様子が見られた。また、各児童の机を、材料や道具を共有できるほどの近い距離に配置したことで、互いに声を掛け合いながら材料や道具に手を伸ばす様子が見られた。他児童との自然な会話を通して「私もこんな形にしたい。」「こんな色合わせいいな。」とイメージを広げ、自分の作品づくりに生かすことができたと考える。

一方で、造形活動の始まりの段階では、互いの活動の様子を自然に見合う姿は多く見られたが、児童同士の自発的な対話はあまり引き出せなかった。対話を通じたイメージの広がりをより多く引き出すためには、学び合いを含めためあてを提示するとよいと考える。

以上のことから、本研究のテーマである「自分のイメージを広げながら、創り出す喜びを味わう児童の育成」を図るために、本実践で行った材料や道具に存分に関わられる学習環境づくりと、児童同士が関わり合える学習環境づくりは有効であったと考える。これからも、図画工作科の授業において学習環境づくりの工夫を行うとともに、それ以外の学習においても、学校全体で目的に合った学習環境づくりの工夫を行っていくことで、児童が学習する喜びを得られるよう努めていきたい。

6 資料



ハートフルアート展で展示された共同作品『レインボーランドの仲間たち』。児童は、楽しみながら創作活動ができたこと、気に入った作品ができたこと、みんなで創り上げたこと、多くの人に観てもらえたことなどを嬉しそうに話していた。